

◆伊藤洋二 選 ～宝井其角の俳句より～

あれきけと時雨来る夜の鐘の声

老化は、体力、知力だけでなく、感情にもあるようで、意欲が湧かない、柔軟性がなくなるというのも「感情老化」なのだそうだ。筆者の老化防止法は、耳を敏感にし、滑舌を心がけ、「あれ・それ」の指示代名詞を使わないで話すということである。これらは言語・記憶・聴覚を掌る側頭葉を鍛え、認知症を予防するはず。言霊の具現たる「俳句」、節と啖呵を暗唱する「浪曲」、耳に癒しの「歌謡曲」。この三つの趣味の継続が大事であると確信。

うぐひすや遠路ながら礼かへし

鳥の鳴声には、「ぐぜり」「さえずり」「地鳴き」がある。「ぐぜり」は、さえずりの練習をする声。「さえずり」は、主にオスが繁殖期に出す声。「地鳴き」はさえずり以外の声で、オス・メスとも同じ鳴き声。うぐいすの「さえずり」はホーホケキョだが、「ぐぜり」は、ホーホケとかケキョで止まってしまうものをいう。「地鳴き」は、チャッチャッチャッと聞こえる。うぐいすは、春告鳥とも呼ばれ、おめでたく縁起のよい鳥で日本三鳴鳥の中の一羽。

雀子やあかり障子の笹の影

蕉門十哲にして第一の高弟のこの句は、難解を極める。しかし、ある落語の演目を思い出した。東海道、小田原宿で、衝立に描いた五羽の雀が朝日に向って飛び出る「抜け雀」と云う人情噺である。障子に映っているのは笹の影だけだが、雀の声が聞こえていて、その声は、まるで障子から抜け出たばかりのような近さで聞こえているということだろうか。

年神に樽の口ぬく小槌かな

一夜飾りはご法度とか。小晦日に米・塩・煮干・水・餅を供え、そして酒。今年元気に飲めた感謝と来年も宜しくと膳奉行を気取り一寸一杯。近頃とんと指先が不器用になり、瓶の蓋開けや釦の掛け外しに手間取る。一升瓶の栓は両手の親指を揃えて抉じ開ける。

人の世やのどかなる日の寺林

京都西山の地蔵院は竹の寺と呼ばれ、一休さんでお馴染の一休禅師の縁の寺である。師曰く「門松は冥土の旅の一里塚めでたくもありめでたくもなし」。こだわりを捨てた瘋癲（ふうてん）、つまりフーテンの寅さんに通じる奔放な人生を送った。ひと昔前のJR東海のCMに「そうだ。京都、行こう」というのがあった。ご褒美の残りの人生「そうだ。飲み会、行こう」。わたくしの朧月夜や繩のれん。

身にからむ単羽織もうき世哉

贅沢を禁止して儉約を推奨、強制するための法令、「奢侈（しゃし）禁止令」というものは、古今東西を問わず存在する。しかし、その裏をかいたのが、江戸の粋で、“裏”に凝った。例えば、羽織の裏地で洒落の自由を守ったそうだ。翻るに、“着たきり雀”に何ら抵抗を感じない筆者は、裏も凝らなければ表も凝らぬ。昨今の成人式の振袖と羽毛ショールなどは眩しい限りである。

夕すずみよくぞ男に生れけり

高度成長期の一九六〇年代半ば、新三種の神器は、カラーテレビ、クーラー、車だった。当時、クーラーは普及していなかったが、さほど暑さを感じなかった。なぜなら、三種の“人器”のステテコ、縁台、団扇があったからである。子どもの頃、夕涼みしながらの大人の話の盗み聞きは、我を忘れさせた。日向ぼこよくぞ此処まで生きにけり。

夕立や田を三囲りの神ならば

墨田区向島にある三囲（みめぐり）神社のご祭神は、宇迦御魂之命（うかのみたまのかみ）という穀物の神様である。浅草寺から言問橋を渡り、隅田川沿いを遡ると狛犬とライオン像が迎える。[元禄](#)六年、[旱魃](#)の時、[其角](#)が「遊（ゆ）ふた地（夕立）や田を見めぐり（三囲り）の神ならば」の句を神前に奉ったところ、翌日に雨が降ったと云う。稲作は水の管理が肝要で、朝昼夕と田んぼを何度も見回る。

重箱に花なき時の野菊哉

伊予の地域には「オトミ」といって、物を貰ったら、お返しとしてちょっとした物を渡す慣わしがある。例えば、重箱でお餅を貰ったら、空で返すのではなく重箱にオトミを入れたり添えるのである。子どもの頃、山帰来の葉で包んだ、しば餅を届ける父親の後について行ったことがあった。その時のオトミは炊き付け用の煙草の茎の小枝であった。真心の籠もったその三本の枝は今も眼裏に残っている。

夏酔や暁ごとの柄杓水

一定量を超えると死亡率が上がるが、適量を飲む分には死亡率が下がるという、酒飲みには好都合なデータがある。「Jカーブ効果」というらしい。喫煙は「絶対悪」のようだが、「相対悪」の飲酒を「必要悪」程度に止め、飲酒十徳に徹することを固く誓う。ほろ酔いや一徳ごとの温め酒。